

# 里山の利用ときのご生産

山からの恵みという皆さんはどのようなものを思い浮かべますか？

柿、栗、アケビ、マタタビなどの果実やワラビ、ゼンマイ、うど、たらの芽などの山菜類を思い浮かべる人もいるかもしれません。あるいはクロスズメバチ(へぼ)などをあげる方もいるかもしれませんね。そんな中、必ず出てきそうなのはきのこ類です。ここにあげたものはいずれも食物として採取利用されているもので、特用林産物を代表するものとも言えます。

しかし、山からの恵みはそれだけではありません。ほんの数十年前まで食べ物だけでなく生活に必要な様々な資材を山からとっていました。それらは薪であり、炭であり、柴であり、落ち葉でした。そしてそのような資材がとられた場所を里山林と言います。しかしながら昭和30年代以降、それらの生活資材は見向きもされなくなり、里山林に手が入らなくなってきました。

## ●里山林に生息する生き物の減少

それに伴い、里山林に棲む多くの生き物が姿を消しつつあります。林の周辺の環境も管理の仕方や構造そのものが大きく変わり、そこに棲む生物たちも急速に減少しつつあります。かつて里山林の林床に見られたカタクリなども、今ではほとんど見ることはできません。一部の山野草のように愛好家による盗掘が減少の大きな原因になっている場合もありますが、かつて身近にいた生物が姿を消していったのは、多くの場合、人による林の利用がなくなったことによる環境の変化が原因です。いわゆるきのこ類も例外ではありません。

## ●マツタケの減少

里山林の利用との関係で最もよく研究され、そのことが一般にもよく知られているのはマツタケでしょう。マツタケは言うまでもなく松林、おもにアカマツの林に発生するものですが、その発生量は年々減少の一途をたどっています。その最大の原因は人間がアカマツ林を利用しなくなったことにあります。かつて人々がアカマツ林を生活の糧に使っていた昭和30年代以前は、あたり一面、人の手が入ったアカマツ林が広がっていました。その頃のアカマツ林は柴刈り等で低木層はほとんどなく、落ち葉掻きも頻繁になされていました。そのため傘をさしてでも林の中を歩くことができ、林床は掃き清められたようになっていたといえます。

そしてマツタケはそのような痩せた山を好むきのこなのです。土壌が痩せていて雑菌の少ない状態だと、アカマツの根と良好な共生関係を結んで生活することができるのです。逆に考えると、昔のような状態に林を戻してやればマツタケが生息できることになります。ただし実際にはアカマツが老齢化していたり、松枯れによりアカマツ林自体がなくなってしまっている所が多く、一筋縄では行きません。

それでも少しでもマツタケが発生していて、比較的樹齢の若い林ならば、手を入れてやることで成果が期待できます。私たちも県内のいくつかの地域でマツタケ山の整備活動を行っています。その年々の気象条件により豊凶はありますが、おしなべて良好な発生が続いています。2年前には、ある場所がかつての豊作時代のようにマツタ

ケが輪を描いて発生しました(写真1)。その土地の人でも近年見たことのない出方であったようです。整備の結果が、その年々の発生量にどれだけ反映しているのかを短期的データから検証することは困難ですが、長期的に見れば、現在放置状態のアカマツ林に手を入れることにより、将来的に健全なアカマツ林を維持し続け、マツタケを継続的に収穫することができると考えられます。

マツタケ以外のきのこでも、人の利用と関わりが大きく減少傾向にあるものは多いと思われます。それらはマツタケと同じように痩せ地を好む菌根菌である場合が多いでしょう。海岸のクロマツ林に発生するショウロ等もその一つだと言われています。私たちの調査で岐阜県下で30種類以上の野生きのこが採取され市場に出ていることがわかっています。そのうちの大半は里山林の菌根菌です。そういつたきのこもマツタケ山整備、あるいは同様の林の管理を行うことに伴って発生量が増加する可能性があります。

また市場で流通しているもの以外にも、味豊かな野生きのこは数多く存在しています。ヤマドリタケモドキ(写真2)な

どはその最たるもので、ヨーロッパ各地で非常に珍重されるヤマドリタケとごく近縁の種です。他にもカノシタ、タマゴタケなどが同様のものとしてあげることができます。こういったきのこは発生時期や料理方法の違い等から、これまで日本ではあまり利用されてこなかったものです。しかし食生活の多様化も進み、そのような食材の価値もあがってきています。そのような利用価値の高いきのこの増産を目論みながら里山林に手を入れることも必要かもしれません。また手入れにより里山林から出てくる材を使って、きのこの栽培をすることもできます。容易に原木栽培ができるものとしてはシイタケ、ナメコ、ヒラタケ、ムキタケなどが候補としてあげられるでしょう。原木の減菌をするなどひと手間かかりますが、マイタケの栽培なども面白いかもしれません。うまくいけば、接種したその年の秋に発生が期待できます(写真3)。

このようにきのこに視点をおくだけでも、里山林の利用に関して様々な価値が生まれてきます。里山研究会ではきのこだけでなく、それ以外の里山林の利用についても研究しています。新たな価値を見いだしながら、里山林を再び利用し、そこからの恵みを味わって行きたいものです。



▲写真1 輪を描いて発生したマツタケ



▲写真2 ヤマドリタケモドキ



▲写真3 原木栽培によるマイタケ